軽井沢シンフォニックコーラス
TUTTI 第５７号
2025.08.29

大旅行？

安光 榮子（ ソプラノ ）

思い返せば、はや４か月。４月１８日夜の合唱練習を終えて帰宅後、翌１９日朝出発の旅行の準備を、疲れて寝ぼけた頭で懸命にしようと着替えの山とスーツケースを前に格闘しました。旅の目的は夫の２月に亡くなった義理の伯母の納骨のため、下関のお墓に行くことでした。しかし、納骨とその後の義母、義姉、夫の従兄弟／従姉妹との昼食の後は、夫との６日間の旅行でした。４月下旬、軽井沢はまだ肌寒かったのですが、下関、その後の宮島、道後温泉、香川の屋島、奈良、京都、福井、金沢と、暖かい気候のところもあり、日ごとに服装のコーディネートを試みましたが夫の、小さめのスーツケース一つで済ませたいとの意向もあり、旅の途中で一回はホテルのコインランドリーを使用することになりました。

１９日朝、東京駅はインバウンドの影響でしょうか、ものすごい数の人でごった返していました。一つの改札を通り抜けるのに少しずつ前に進むといった感じでした。夫は義理の伯母の遺骨を都内の伯母のマンションに取りに行って、新幹線の発車に何とか間に合うように東京駅に戻って来ることになっていたので、私はスーツケースを転がし、リュックを背負い、ショルダーバッグを肩にかけ、移動しました。新幹線に乗る前に駅弁とお茶を買い、待合に何とか席を見つけ、時間まで座っていました。その前にお手洗いの個室でもう少しでショルダーバッグをフックにかけたまま忘れるところでした。次に入った女性が「忘れてませんか？」と２、３メートル追いかけて来てくれて事なきを得ました。危ない、危ない。日本でよかった！とホッとしました。その時から荷物の数を常に数えました。

下関には新幹線は止まらないので新大阪で乗り継ぎ、小倉まで行き、ローカル電車で下関まで戻りました。その晩は下関のホテル泊。翌 20 日、時折小雨がパラつく中皆で無事に納骨を済ませ、関門海峡を臨む「海峡ビューホテル」での昼の会食も済み、皆それぞれの目的地に向かい、私は電車で再び下関から小倉に行き、そこで夫と落ち合い、新幹線さくらで広島を経由し、宮島口に移動しました。夫の亡くなった義理の伯母は下関出身で、故に彼女の希望もあり、遺骨の一部を関門海峡へ散骨すべく、夫は関門トンネルを渡った門司側にある和布刈神社に依頼に行っていたのでした。さて宮島口ではもう閉店に近い時間でしたが、老舗「うえの」で名物の穴子をいただきま

した。夫は白焼きで私はたれ焼きの丼にしましたが、白焼きの方がしっとりしていたので、ちょっと残念に思いました。

翌２１日朝は連絡フェリーで宮島に渡り、厳島神社と大願寺を訪れました。ここにも多くのインバウンド観光客の方々がいました。厳島神社の本殿を巡り、海の中の赤い鳥居も眺めました。そして宮島口駅に戻り、広島経由で呉港に行き、フェリーで２時間、瀬戸内海に浮かぶ島々を船はよけながら、私たちは眺めながらゆったりと進みました。水面が午後の日差しでキラキラしているのがきれいでした。フェリーの中でスペシャル（全部乗せ)うどんを昼食に摂りました。そして愛媛の松山観光港に到着。そこから伊予鉄道の高浜駅まで歩き(暑かったですね) 普通電車で大手町経由、そして路面電車で道後温泉に行き、オーベルジュ（宿泊施設付きレストラン）にチェックイン。このオーベルジュは道後温泉と同じ原泉からお湯を引いているとのことでした。夕食まで道後温泉本館近辺を散策。夕食は愛媛だからか、鯛が美味しかったです。お肉もあったし、その晩の気分で赤ワインを２杯飲んでしまいました。大きなホテルではありませんが、下の階に温泉の浴場がありました。

さて、翌22日は香川にいる友人に会う約束がありました。朝、夫と一緒に道後温泉を出て路面電車で松山駅まで向かいましたが、夫は途中下車し、松山城、その後の姫路城観光のため手ぶらで行かなければならなかったので、松山駅で乗り換えの際は私はスーツケース、リュック、ショルダーバッグを携行しながら、階段を使う地下通路は使わず、ゴロゴロと路面を歩いて松山駅に行き、そこから予讃線に２時間乗り、香川の高松駅乗り換えで屋島駅に行きました。屋島は単線だったかしら？、駅前にはわずかに車が数台停められるほどの駐車場があるだけの小さな駅でした。あの屋島の合戦の屋島だとは友人から聞くまで思い至りませんでした。屋島駅には友人が車で迎えに来てくれて、そのまま讃岐うどんを食べに行きました。友人とは東京新宿のある外資の製薬会社の同じフロアで仕事をしていたことがありました。彼女と他、合わせて４人で食べに行ったり、映画を見に行ったりとした時期がありました。今思うと懐かしい若い頃ですね。

讃岐うどんは、本場だから地場の自分でトッピングやつゆを入れたりするところを想像して行ったら、規模の大きなきれいなうどん屋さんでした。彼女も香川に移って２年ほどなのでまだ色々情報を集めているところなのだそうで。彼女の現在の住まいにちょっと連れて行ってもらう前に海辺にちょっと寄って、目の前にまるで対岸の陸地のように見える大きな小豆島を見ました。彼女の入れてくれたコーヒーをいただき、しばし話をした後、また屋島駅まで送ってもらいました。とても田舎なのでスーパーやコンビニに行くにも車で１５分かかるので、ホームベーカリーを買い、パンは

自分で焼くのだと言っていました。ウグイスが鳴いていましたっけ。屋島駅からは軽井沢まで帰りの JR 乗車券は一枚です。乗り降り自由なので失くしたら大変です。考えてみたら、軽井沢を出てから、何枚もある乗車券、指定席特急券を日ごとに封筒からバッグのポケットに移しておき、順番に使ってきたのでした。これらのほぼ一週間分にもなる乗車券や指定席特急券を、軽井沢駅のみどりの窓口で出発前日に二人分それぞれをジパングで購入するのに一時間半を費やしました。旅程表を見ながら、窓口の担当者も必死で指定席を予約し、券を発行してくれました。

屋島から高松へ、そして瀬戸大橋を渡り、岡山へ。新幹線さくらで新大阪へ。そして快速で奈良へ。途中、姫路で姫路城観光を終えた夫が乗り合わせて来ました。

（つづく）

大賀ホール（１）

真崎 みよ子（ アルト ）

2007 年借宿に転居し、翌年にシンフォニックコーラスに入れていただくと、2010 年には何と軽井沢にこのホールありと期待していた大賀ホールのステージに立つことになりました。



ステージ練習の前に音合わせのためのラウンジに向かいましたが、入った部屋の正面の壁に貼ってあったポスターが目にはいり、びっくりしました。なぜならそれはまさに私が聴きにいった日の演奏会ポスターだったからです。

当時私は東京文化会館まで歩いていける距離の日暮里に住んでいました。「３７年 (1962 年) １月３１日」、「東京フィルハーモニー交響楽団」、と懐かしい文字が並び、さらに、＜独唱 大賀典雄 バリトン＞とあるではないですか。曲目はブラームスの『ドイツ・レクイエム』。名だたる大曲です。恥ずかしながら私はその曲のことは覚えていません。

それはともかく、独唱者の隣りには「国立音楽大学合唱団」と書いてありますが、この数年後に結婚して国立に住み、働いた幼稚園が国立音楽大学から数分足らずの所であったことを思えば、このポスターには私の青春時代がぎっしりつめこまれているのでした。さらにこのポスターは私を追いかけるようにここに貼られて、待っていてくれたのです。なんという偶然でしょう。いえ、偶然ではなく、これは運命です。こうして私は大賀ホールと結びつきました。

緑の音楽祭での初舞台で歌った曲が何だったかは、『ドイツ・レクイエム』を覚えていなかったのと同じにすっかり忘れていました。困ったことです。でも、大賀典雄さんのお名前やお仕事のこと、大賀ホールが素敵な五角形であること、ここを借用して浦和の幼稚園児たちを連れてきてさまざまな時間を過ごしたことなどはしっかり心に残っています。そのいくつかを思い出すままにしばらく書かせていただきたく、よろしくお付き合いください。

【編集後記】

☆ 安光さんが大移動した、ということを小耳にはさんで原稿をお願いしたのですが、いやはや、読むだけでも大変さが伝わります。文章にしてくださるのも大変なことだったと思います。重ね重ねお疲れ様でした。そして、まことに恐縮ながら「つづき」の移動状況も楽しみにしております。

☆ TUTTI も５０号を越えてついに真﨑みよ子さんの御登場です(*^^*)　こちらも第１回なので今後のお話が楽しみです。

☆「軽井沢組曲」再演への道。白枝さんの紹介文を読んであらためて「軽井沢組曲」の大切さを思います。小学生から後期高齢者までが一緒に歌う情景を思い描いています。（岡田）

■お知らせ ①

☆ 茂沢にクマ出没（８月 22 日早朝）　犬の散歩で茂沢集落方面へ歩き、戻ってきた時に、道路の前方の草むらから黒いものがコロンと出てきて、ころんころんと道路を横断し、ガードレールの切れ目から草むらに姿を消しました。『あ。クマだ』と声に出したのは、クマが道路から川の方へ姿を消した後のこと。駄犬は道端の草のにおいを嗅ぐのに夢中で、何も気が付いてない。クマは小さく見えたので、もしや母熊が近くにいるのでは、としばらく鈴を振り回して音を立て、ラジオでは音が小さいので音楽にしてボリュームをあげて警戒すること数分間。恐る恐るクマ出没地点を通り過ぎて帰宅しました。

ピッキオに目撃情報を伝えたので、その後、近くに「周辺でクマの目撃情報がありました」という看板が設置されました。早朝はゴルフ場へ向かう車がけっこう通る道路です。こんな道路でもクマが出るんだなあと、あらためて緊張を高めております。（岡田）

☆犬連れでクマと遭遇とはキワドイ状況！でしたが、ご無事で何よりでした。貴重なことゆえ情報共有すべく制作部の独断にて「お知らせ」として掲載をいたしました。皆さま「森の奥のことだから」などと“たかをくくらず”、特に犬連れ散歩の際には十分ご注意くださいませ。（白枝）

■お知らせ ②

町内のコーラス団の方々に組曲初演時のリーフレットと録音ＣＤの試聴･回覧を始めましたので、二点に同封した以下のメッセージも併せてご承知おきください。（白枝）

軽井沢組曲『美しい村』の演奏について

軽井沢組曲「美しい村」は、日本武尊伝説とともに碓氷峠が登場する「霧の峠道」にはじまり、旧中山道の宿場の賑わいを馬子唄風に歌う「宿場さんざめき」、浅間山の天明大噴火をオペラ調に歌う「浅間山大噴火」、明治時代に軽井沢を見いだした宣教師の歓喜の様子をゴスペルで表現する「あぁ美しき喜び」、戦後の大日向開拓の苦難を描く鎮魂歌「大日向レクイエム」、そして 最後に軽井沢の春夏秋冬を謳い上げるフィナーレ「美しい村」までの全１４曲で構成され、軽井沢の風土に立脚し、文化、歴史や自然環境などが多彩に表現されています。まさに軽井沢を愛する軽井沢人によって創作されたすべての軽井沢人のための楽曲です。

２０年前、町民と東信地区の有志が大賀ホール開館を祝って「第九」を二年連続演奏しましたが、その演者から３８名が翌年に創作されたこの軽井沢組曲を歌い、それが始まりとなって軽井沢シンフォニックコーラス団が立ち上がりました。その経緯からこれまで当コーラス団のみが組曲を演奏してきましたが、ひとつの合唱団では演奏の場所や回数に限度がありますし、そもそも町内であまねく演奏するための楽曲であるのに、そのことの周知・共有がすすんでいませんでした。

大賀ホール開館２０周年のこの機に、組曲を町内で広く演奏いただくため、町の皆様へのお知らせと楽譜の整備を当コーラス団で行うことにいたしました。つきましては、町のコーラス団の皆様に 全歌詞を掲載した初演リーフレット と ２枚組の初演録音 CD を展開いたしますので、記憶が薄れた方は曲の輝きを思い出してください。組曲そのものをご存じない方は１曲１曲の詩とメロディーを是非ともお聴き下さい。余談ながら、先日コンサート最後の全体合唱で歌いながら、ここで『軽井沢組曲 第14曲 美しい村』を歌えたらどんなにか素晴らしいだろうと、強く想ったところです。

軽井沢シンフォニックコーラス団　団長 大林 義博
担当 白枝 庸介